

【第2回】 片瀬、鵜沼、辻堂地区の埋もれた小字の発掘

藤沢地名の会 会員 布施克彦

1 各地区の概要

(1) 地区の自然

- ・ 本講座の対象地域は、概ね東海道本線の南側の市域となる。
- ・ この地区の東には三浦丘陵の東端となる片瀬丘陵（通称片瀬山）が南北に走り、鎌倉市との境界を成している。
- ・ 片瀬丘陵の西は、大磯まで続く海岸砂丘で、砂丘列は主として南北に走り、砂地の丘と低地が複雑に交錯している。
- ・ 地区の東側には境川（下流を片瀬川と呼ぶ：以下片瀬川と表示）が南流し、片瀬地区と鵜沼地区の境界を成して相模湾に注ぐ。
- ・ 地区の西側には引地川が南流し、鵜沼地区と辻堂地区の境界を成して相模湾に注ぐ。
- ・ 片瀬、引地の両河川は、往時氾濫、蛇行をくり返し、旧流路の一部の低地が沼、池となったが、その多くが近年の開発によって埋め立てられた。
- ・ 片瀬地区の沖に浮かぶ江の島は、従来片瀬丘陵の南端部だったが、およそ2万年前の地殻変動によって、独立した島となったとされる。平地のない地形は対岸の片瀬地区と一線を画すが、砂州によって片瀬側と繋がり、陸繋島の様相を呈する。

(2) 地区の歴史

- ・ 地区北部にわずかな水利による農業が営まれていた他、古来この地域の大部分は砂丘と松林に覆われた無人地帯であった。片瀬丘陵の山裾などの一部を除き、古代の遺跡はあまりない。片瀬北部の宮畑地区に、奈良・平安時代の遺跡が確認されている。
- ・ 中世に入ると、この地区を北西から南東へと幹線道（旧東海道の一部？）が貫くようになる。その沿道は、八松が原、砥上が原などと称される荒蕪の地であった。この地区の大部分は伊勢神宮に寄進された大庭御厨と呼ばれ荘園の域内で、沿道に沿って少しずつ開拓が進み、集落の発生を見るようになった。
- ・ 鎌倉に武家政権の誕生以降は、鎌倉との間を往き来する人が増え、特に片瀬地区南部は鎌倉の西の出入り口として宿駅が整備され、賑わうようになった。
- ・ 江戸時代この地は幕府の直轄領となり、砂丘の無人地帯は砲術の調練場として利用された。また江の島が、鎌倉や大山と抱き合わせで江戸庶民の手頃な遊山の地として、多くの人が訪れるようになった。
- ・ 明治以降は鉄道の発達と共に、別荘地や京浜方面で働く人達の住宅地として、それまで無人の丘陵や砂丘、松林だったところが開発され、地形が変わり、人口が急増し、様相が一変して現在に至る。

2 片瀬、鵜沼、辻堂地区の地名由来

- ・この項では、現在の藤沢市を区分する13地区の一部である、片瀬（江の島）、鵜沼、辻堂の地名由来について書く。

（1）独立した村から藤沢市の大字へ

- ・片瀬、江の島、鵜沼、辻堂とも、江戸時代より独立した村であったが、明治以降順次藤沢市に併合されて、市内の**大字**となった。
- ・片瀬村、江の島村が明治22年（1889年）に合併⇒川口村。川口村は昭和8年（1933年）⇒片瀬町。片瀬町は昭和22年（1947年）⇒藤沢市の大字へ
- ・鵜沼村は明治41年（1908年）⇒藤沢（町⇒市）の大字へ
- ・辻堂村は明治22年（1889年）に、羽鳥、大庭、稲荷各村と合併⇒明治村。明治村は明治41年（1908年）⇒藤沢（町⇒市）の大字へ

（2）各大字の地名由来

- ・**片瀬**の地名由来は、地区の西境を流れる片瀬川の「瀬」に由来するものと推測される。
「片」は、「方」、「固」、「堅」、「瀉」、「肩」など、古文献によって表記はまちまち。最も古い奈良時代の「正倉院古裂銘」には「方瀬」と記されている。
- ・**江の島**の地名由来は、入り江に隆起した島、絵のように美しい島、砂州の部分が柄杓の柄に似ているから、などと諸説あり。
- ・**鵜沼**の地名由来は、引地川の流路跡などが作った点在する沼や池に、くぐい（鵜＝白鳥の古名）が飛来する風景から来たとする説が有力。
- ・**辻堂**の地名由来は、地区を北西から東南に走る古道と、北東から南西に走る古道の交点の四つ角の近くに堂宇（現在の宝泉寺あるいは宝珠寺）があったところから来たとされる。



【写真2-1：現在の辻堂四つ角】（筆者撮影）

3. 片瀬、鵜沼、辻堂地区の主な地名（小字）とその由来について

- ・小字とは：

各地区（大字）は、複数の小字によって区分されている。戦国時代以降、領地からの年貢取り立てのための検地（豊臣秀吉の太閤検地が有名）が行われ、江戸時代以降にも検地が再行われた。検地の作業過程で土地が区画、細分化され、細分化された土地それぞれに地名が付され、それらを字と称した。明治21年（1888年）の市町村制公布以降、大規模な行政区画の統合、再編成が行われ、合併された旧村が大字となる一方で、江戸時代より存在した字も統廃合され、大字を構成する小字となった。

※ 以降は、本テキストに添付された片瀬、鵜沼、辻堂各地域の小字図＝資料6，資料7，資料8の各図を参照

（1）片瀬地区の特徴ある小字

（資料編「資料6：片瀬地域の小字」参照）

- ・ 片瀬川との関係を思わせる小字に、**鯨骨**と**浪合**がある。鯨骨は片瀬川を遡ってきた鯨の骨が見つかった場所で、比較的近年まで、下諏訪神社の入口南側に、神池と称する池があり、これも片瀬川の流路変遷によって出来たものと思われる。浪合は、海から片瀬川を遡る上げ潮が、川を下ってくる川波と合わさる場所。これらの小字名から、昔の片瀬川は、現在と比べて規模が大きく、流路も違っていたことが想像できる。
- ・ 片瀬地区の大部分は片瀬川より東側だが、**西浜**全域と**大源太**の一部が、西側にはみ出ている。特に大源太の箇所は、片瀬川が往時、西側に大きく蛇行、湾曲していたことを物語る。大源太の地名は、この地の旧家の小塚家の当主が、代々「源」の字を名前に付けたところから来ているという。そのさらに西側にある**川袋**も、湾曲する川が袋状になっていたことから出た地名だが、現在は鵜沼地区に編入されている。
- ・ 片瀬地区には片瀬山と称する丘陵が南北に走り、標高の高い部分に**赤山**、谷の部分に、**北の谷**、**下ノ谷**、**貉ヶ谷**などの小字がある。
- ・ 地区の北部にある**宮畑**は、諏訪神社が元あった場所と言われ、今は失われたが、この付近に諏訪ヶ谷という地名もあった。このあたりが、片瀬地区で最も古くから人の住んでいた場所と考えられている（奈良・平安時代の遺跡が存在）。
- ・ **新屋敷**は、宮畑などから、人々が移り住んでできた新しい集落と言われる。この川筋（左岸）に川湊があり、物資集散の拠点として、江戸時代には活潑な人の出入りがあった。付近の川沿いの坂道は、河岸の坂と呼ばれた。
- ・ 江の島の小字は、**東町**、**西町**、**須田町**のみで、以前東町は獺（漁）に携わる人が住むので獺師町、西町は遊山客を相手にする人が住むので茶屋町とも呼ばれた。須田町は島の北側に新しく埋め立てられた土地で、新町とも呼ばれる。須田は「洲」に繋がる地名と思われる。

（2）鵜沼地区の特徴ある小字

（資料編「資料7：鵜沼地域の小字」参照）

- ・ 鵜沼地区には、過去の砂丘地帯を思わせる小字名が目につく。北東から南西に走っていた砂丘群に沿って、北から、**上岡**、**中岡**、**下岡**の小字が並ぶ。また、江ノ電・鵜沼駅の周囲は今でも高台となっており、片瀬川を東の境とした砂丘列が織りなす高低差のある土地で、その低地部に藤が自生していたところから、**上藤ヶ谷**、**中藤ヶ谷**、**下藤ヶ谷**の小字名が生まれた。藤ヶ谷は鵜沼藤が谷として、現在の地名としても残っている。



- ・ 片瀬の項で触れた**川袋**は、片瀬川が袋状に湾曲し、市民に親しまれている蓮池は、川の流路の一部が残ったものと思われる。江ノ電の駅にも、以前は川袋駅が存在した。
- ・ 鵜沼は半農半漁の村であり、沿岸漁業も行われていた。地区の海岸部分には、**上鰯**、**下鰯**の小字名があり、漁獲の中心がイワシであったことを思わせる。
- ・ 砂地が大半を占める鵜沼は農業を行うには不向きな土地で、引地川や（一部は片瀬川）、あるいは地名の由来となった沼や湧水、地下水などを利用した小規模な田畑耕作が一部に見られた。これらは主に地区の北部で行われ、鵜沼本来の集落もこの地域に集中していた。**中井**、**堀南**、**内田**、**奥田**など、水利や農業との関連を思わせる小字名は、地区の北部に偏っている。
- ・ 地区の南部には、砂原、松林などが広がり、**原**、**柳原**、**藤原**など、無人の荒蕪地

を思わせる小字名が目立つ。

(3) 辻堂地区の特徴ある小字

(資料編「資料８：辻堂地域の小字」参照)

- ・ 資料８の小字図のうち、旧羽鳥村内の小字と東海道線北側の旧辻堂地域は明治地区に編入されており、対象外とする。
- ・ 辻堂地区の砂丘は大規模で、**砂山**、**砂場**、**高砂**など、鵜沼以上に砂丘由来の地名が目立つ。**大ヤゲン**という小字は、砂丘の自然造形が、大きな薬研（薬をすりつぶすためのV字型をした容器）を連想させて付けられたとの説がある。
- ・ 幹線道路の交差点名として今も知られる**浜見山**は、漁師が海を眺めて魚群を発見するために登った砂丘であったといわれ、辻堂が、鵜沼同様に沿岸漁業を生活の糧にしていたことが分かる。
- ・ 辻堂は鵜沼以上に砂地に覆われた農業不適の地だが、**堺田**、**堂面**、**一ノ坪**など、農業の営みを思わせる小字もある。堂面は付近にあった阿弥陀堂を維持するための免田があったとされる（免→面に変化）。また辻堂地区で最初に田が作られたといわれるのは**久根下**だが、小字名の由来は不明。
- ・ 北部にある**後山**は砂丘の高まりから付いた小字名と思われる。**大荒久**は荒れ地を意味し、**長久保**は砂丘に沿った細長い低地で、いずれも開墾の困難な土地であったことが偲ばれる。
- ・ **熊ノ森**の辺りは以前森になっていて、鎌倉時代初期の武将である熊谷直実の領地であったとされる。**地藏袋**は、鵜沼・川袋と同様に、引地川が袋状に西に蛇行していた場所にあり、この地に祀られている木又地藏から小字名が付けられたと思われる。



【写真２－３：熊の森権現社】（筆者撮影）

(4) 小字は今も残っている

・現在は住居表示が変わり、小字名の多くが消えた。それでもいまだに多くの小字名が我々の周囲に存在している。小字名は具体的に、どこに残っているのか？

・バス停の名称として：

- * 片瀬地区：新屋敷、西方、西浜、東浜
- * 鵠沼地区：藤原、高根、上岡、中岡、藤ヶ谷、原
- * 辻堂地区：熊ノ森、出口、堂面、長久保、高砂、浜見山

・駅名として：

* 江ノ電石上駅（鵠沼の小字・砥上は「いしがみ」と読む）
過去江ノ電には、川袋駅、藤ヶ谷駅、新屋敷駅、西方駅（現：湘南海岸公園駅）など、小字名を付した駅があった。

・公園名として：

- * 片瀬地区：西浜、西原（西ノ原）、大源太
- * 鵠沼地区：八部、内田、横須賀、花立、奥田、藤ヶ谷、上岡、下岡、高根
- * 辻堂地区：長久保、勘久、久根下、初多良（タラ）、一ノ坪、大荒久、砂場、浜見山、堂面

・市民の家の名称として

- * 片瀬地区：浪合
- * 鵠沼地区：藤ヶ谷
- * 辻堂地区：砂山
- * その他、地区の町内会の名称として残っているものもある。

・その他

- * 交差点の名称：浜見山
- * 住居表示として：鵠沼藤が谷、鵠沼石上
- * 電柱の表示板：小字名が表記された電柱の表示板が数多くある。

(5) 小字と集落の違い

- ・ 小字は大字の内部を、無人の土地を含めてくまなく区分しているが、人家の集まる集落は、水利、地形、土壌など人々が暮らしやすい条件の場所に発生するので、複数の小字を跨ぎ、あるいは小字の一部分であったりする。
- ・ 従って、集落名の多くは小字名と一致しない。たとえば・・・
 - * 片瀬地区の以前からの集落は、下の谷本町、東り町、竜ノ口、祖堂下、門前、中町、上町、台町、浜須賀、南浜（太字の集落名が、小字名と重なるところ）

＊鵠沼地区の以前からの集落は、上村、宮ノ前、宿庭、清水、大東、仲東、荻田、原、堀川、**引地、花立**、新田、**石上**、納屋（太字の集落名が、小字名と重なるところ）

＊辻堂地区の以前からの集落は、東町、西町、南町、北町、日ノ出町、五十軒、**砂場のどんずまり**（太字の集落名が、小字名と重なるところ）

（6） ご自宅の小字名は？

- ・ 小字名には、その土地本来の地形や自然環境、そして過去の様々な出来事に由来するものが多い。それらが、住居地表示の度重なる改変により、人々の記憶から失われつつある。
- ・ 旧来の地名は先人からのメッセージや警告を含むものが多く、現在自宅のある場所、あるいは関係の深い場所の小字名とその由来を知ることには意義ある。
- ・ 家のそばを流れる川、家の窓から見える近くの丘、いつも遊びに行く公園。今住んでいる土地には様々な履歴が埋もれ、それらが小字名に反映されていることが少なくない。ご自宅の場所に埋もれている小字名を知ることと、意外な発見に出会うかもしれない。

主な参考資料

＊『藤沢の地名』日本地名研究所編 平成 9 年(第 3 版) 藤沢市

＊平成 25 年度 藤沢市生涯学習大学テキスト

『地名が語る藤沢の成り立ち』 仲摩邦夫 著

＊藤沢地名の会・片瀬探訪資料 平成 31 年 3 月

＊藤沢地名の会・鵠沼探訪資料 令和元年 10 月

＊藤沢地名の会・辻堂探訪資料 令和 2 年 11 月